

ブータンへの旅



ブータンへの旅の雑感を農耕文化の会の最古参のメンバーの一人でもある野和田リーコさんが寄稿してくださいました。いつものこととはいえ、旅では、たくさんの出会いがありました。

野和田リーコ(アジア太平洋農耕文化の会会員)

2001年のブータンへの旅は、10月24日から11月2日までと早くから計画が立てられていた。ところが9月11日のニューヨークの事件で実施が危ぶまれた。

しかし、ブータンの国民の85%が農業に従事していること、しかも西洋型の近代化を受け入れず、アジア独自の文化を守り続けている特異な国であるということ、それと近年、日本の農業技術者がこの国の農村の発展に貢献したという高い評価を受け、非常に親日的であること等々、この国への旅はみんなが期待していた。そのようなわけで、多少の不安を抱えながらも予定通り飛び立つこととなった。

地図で見るブータンは、中国のチベットやネパールとインドの間に挟まれた大ヒマラヤ山脈の東端の南斜面に位置している。山に囲まれていることで交通が非常に不便であること、その上、国策として急激な近代化を避けている故もあって、観光客は月1,000人程度と制限があり、飛行場はパロに一つだけで週にカルカッタ-バンコック間を一往復するだけといったような不都合さである。従って往きは、陸路でインド側からの入国ということになった。しかも最近整備された自動車道は、険しい山岳地帯を行く道でさえトンネル一つなく、首都ティンブー(人口9万人弱)と他の主要都市(ほとんど人口4万人程度)とを繋ぐ一本道は、山裾を巡り巡って中型バスで100キロ走るのにも6,7時間を要するといった非常に移動に時間がかかる旅であった。

しかし、この旅の目的は農村地帯をトコトコ歩いて村人と接するのが本命である。又、村から村への移動の途中眺めた東部の海拔1,000m~3,000mにあるティンブー川を挟んだ両側にある渓谷沿いの農村の風景は、飽くことのない美景の連続であった。特に稲の刈り入れを終えてよく手入れの行き届いた段々畑の美しさは、思わず感嘆の声を上げる程すばらしいものであった。

それと首都ティンブーからプナカへ向かう道すがらに望んだ大ヒマラヤ連峰の風景は、よく晴れていたこともあって、絶景の一言に尽きるものであった。その中で、一際目立ったガンカーブンスム峰(7,541メートル)の雪を冠った姿は雄大そのもの、しばし車を止めて見とれたり感激のあまり、放送大学の学歌を誰彼となく合唱し始めたほどであった。

さて、ブータンは仏教国である。山は聖なるもの、冒すべからざるものとして崇められているので、登山は禁止されている。従って、山を削ってトンネルを造ることはこのブータンでは考えられないことである。それでヒマラヤ登山はチベット側、またはネパール側から登るようになっている。

それと対照的なのが日本の山々である。最近、帰国してすぐ参加した山歩き会の「刈寄山(秋川の山々の玄関口にあたる戸倉三山の一つ)」では途中、採石場があり、静かな山間の道を大型のダンプカーが激しく行き交い、山肌が削られて痛々しいものであった。また多くの山が観光に使われてケーブルやリフトが設置され、何万人もの人々が便利に山の楽しみを享受できるようになったが、一方モラルも問題になっている。

最近アジアの大半の国々は、近代化を急ぐあまり、経済優先の効率と利潤ばかり追い求め、その結果、経済も破綻し、様々な社会問題を抱えることになっている現実がある。

そうしたアジアの近隣諸国の状況を見て、ブータンが無理で性急な近代化を望まず、緩やかな成長をしているとしたら、この国の政策は何と賢明な、そして健全な国造りを目指していることかと、脱帽したくなる。

これまでに歩いたアジアの国々と比べて、この国の人たちは何とすがすがしく穏やかな生活をしていることか・・・それは多分、人間にとって一番大切な食料を生産する農業を基盤とした食糧自給率100%の生き方に対する自信と誇りの表れだと思う。

それともう一つ、他のアジアの国々と比べての大きな違いは物があふれていないことである。どこの商店にも実質的な品物だけが並べられている。今まで歩いたアジアの都市部の市場は商品が、それも大量生産の安物が通りまであふれていたのを思うとすっきりとして気持ちよい。お土産の店も数が少なく、売られているのは丁寧に仕上げられた手作りの物が多く、値段も高くも安くもなく、それ相応で好感が持てた。

何よりすばらしいと思ったのは包装にビニール袋を使用していないことである。古新聞紙で包むか、値の張ったおみやげ等は麻の袋に入れてくれたのには感激だった。これは日本に帰ってから充分、買い物袋とし

て使える代物で、これこそ、今世界が目指している公害を起さないうりサイクル社会の実現の先端をいっているといつてよい。

また発展途上国の観光地に見受けられがちな客を引く、あのけたたましい呼び声や幼い子供たちが土産物売ろうとして観光客に媚びたり、まといついたりする姿はついぞ見かけることがなかった。それは月1,000人の観光客しか受け入れられないということで、その必要がないということかも知れないが、とにかく気持ちがよい。

いずれにしても、この穏やかさはどこからきているのだろうか。多分、自然の恵みに感謝して、必要以上の物欲に拘らない生活態度、敬虔な仏教への信仰がその基にあるように感じられた。現に、どの街や村にも中心には寺院があり、ダルシン(経文旗)がたてられていて、早朝より参拝する庶民の姿が見受けられた。

宿泊所であるホテルには豪華さはなくても清潔で、一応必要な物はすべて備わっているが必要以上のサービスはない。たまたまお茶を入れるお湯を要求したところ、部屋に運んできた若いボーイがポットをテーブルに置いて、チップも要求せずさっさと足早に去っていったのは驚きだった。

この会の旅行では、枕銭だけは各自が各々の部屋で負担するが、チップは原則的に出さないという取り決めになっている。ところが何処でも大体物欲しそうな顔をボーイにされて困ってしまう。今回も途中で泊まった最初の夜、カルカッタのホテルでは、ボーイならぬチーフのような大人が注文もしない水を部屋へサービスだと持ってきた。そして、お世辞を言いながらチップを欲しそうにして、いつまでもうろうろされたのには辟易とした。これはほんの一例に過ぎないことだが、この短い旅の間に接したブータンの人たちの態度はそれと対照的であった。最近では死語となってしまった感のある「清廉」とか「清貧」という言葉が十分生きていると感じられた。

しかし、ブータンの庶民の生活はみたところ決して裕福とはいえない。だがその清貧とでもいういさぎよさは気持ちよい。物質の豊かさより心の豊かさが本当に大切なことだと言うことを改めて考えさせられた今回の旅行中の出来事だった。

ところで一つ気になることがあったのは、ブータンの教育のことである。それは小学校から国語のゾンカ語の授業を除いて他のすべての学科は英語で行われているということである。高学年の若者は勿論のこと、小学生まで英語を理解し使いこなしている。これはこれからの国際社会に生きていくためには必要なことであり、このような新しいことを取り入れている施策は賢明なことではないかと思う。

しかし一方伝統的な民族の文化を伝えるため

には言語が大きな役割を果たしていると思う。その伝統のゾンカ語をやはり大事に伝えていって欲しいと願われる。多分この国の教育方針もこのようなバランスをどのように取ろうかと結構調節に努力しているのではないかと見受けられた。その一つが一般国民や学校の制服に民族衣装のゴー(男性用)とキラ(女性用)の着用が義務づけられていることである。私は本に紹介されているものを調べてみたり、店に売られている物を手に取って見たが、なかなかよく工夫されて着易く作られている。またこの気候に合った装いのように思えた。何よりも品質がよく、柄とデザインになかなかしゃれたものが多いのが楽しかった。

それともう一つ気になっていたこと、それはブータン人たちの結婚形態のことである。それは多夫多妻であり、夫婦が相互に認め合っているということである。ブータンの女性は働き者で経済力があり、従って男性に扶養してもらおうということがないのでこのような形態になっているのではないかと私は想像した。現に何軒かの農家をフィールドワークで聞き取り調査した限りでは応接に出た女主人は家付きの娘で、夫である男性が女性の家へ入っているという。いわゆる日本の婿取りという家族の構成であった。そこで不躰とは思いつつ、「貴女の夫は他に妻を持っているのか、また貴女自身も夫以外の男性がいるのか」と尋ねてみた。すると「夫はいるが、私には居ない。」と笑って答えてくれた。真偽の程はわからないが、この問題はそんなにすっきりいくものではないように思われる。

それに多分、ブータンもこれから良くも悪くも変わらざるを得ないのではと思う。これだけ豊富な情報がかめぐっているこの時代、ITを通してどのような辺境な地域にも世界の動きが止めどもなく入ってくる現在、特にこれからの時代を生きる若者に影響を与えないわけにいかない。家族の考え方とか価値観、そしてその中で夫婦形態も変わっていくのではないかと感じられた。

ティンプーの市場にて

